様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｈ０１６０１

研究課題名（和文）ジョージ・ミュラーのキリスト教福祉思想が日本社会事業へ与えた影響に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Influence of George Muller's Christian Welfare Thought on Japanese Social Welfare

研究代表者
木原　活信（Kihara, Katsunobu）

同志社大学・社会学部・教授

研究者番号：２０２７５３８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、英国のジョージ・ミュラーの福祉思想が日本の社会事業形成へ与えた影響に関する総合的研究である。本研究では、１）これまでほとんど学術的に解明されることのなかったミュラーの人物像を実証的に解明した。その際、彼が強く影響を受けたドイツの敬虔主義思想を明らかにすること。また彼もその運動のリーダーであった英国のブラザレン運動を実証的に解明が中心となる。そして、２）そのミュラーが日本に及ぼした影響について、山室軍平のミュラーの影響にかかわる実証的研究、そして石井十次のミュラー理解とそのプロセスを詳細に明らかにすることによってミュラーの福祉と日本近代の社会事業形成の影響の全体像を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで、社会福祉学の研究史上において、未解明で、等閑視されてきたミュラーの実像の史実の発見であるばかりか、新しい社会事業史の解明につながり、研究結果においても学術的独自性が期待できる。またキリスト教社会福祉学においても、これまで、どちらかと言えば社会派の関連が福祉の直接的影響の中心として議論されてきたのに対して、ほとんど表舞台にあらわれることのなかった福音派や敬虔主義という内的信仰や神秘主思想が、逆説的に社会福祉の形成にもっとも強い影響の一端を担った可能性への探究は独創的かつ発展的であり、学術的創造性が期待できる。

研究成果の概要（英文）： This study is a comprehensive research on the influence of George Muller's welfare philosophy in England on the formation of social programs in Japan.1) To empirically elucidate Muller's personality, which until now has rarely been elucidated academically. In doing so, we will clarify the German pietistic thought that strongly influenced him. 2) To empirically elucidate the British Brethren movement, of which Muller was also a leader. And 2) To empirically elucidate Muller's influence on Japan, which involved Muller's influence on Gunpei Yamamuro. I also clarified in detail Ishii Juji's understanding of Muller and his process. Through these studies, we have elucidated the overall picture of Muller's influence on welfare and the formation of modern social programs in Japan.

研究分野：社会福祉学

キーワード：ジョージ・ミュラー　山室軍平　石井十次　ブラザレン運動　ブリストル孤児院

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ジョージ・ミュラー(George Müller, 1805-1898)については、ブリストルの孤児院創設者、キリスト教伝道者、として知られてきたが、「偉人伝」的な扱いは別として社会福祉研究の中では、十分に検証されることなく学術的探究はほとんどなされていないのが現状であった。

実際、社会福祉の多くのテキスト類にも、多くの欧米の慈善事業家や社会事業家の氏名が挙がっていてもミュラーについては言及されていない。日本の社会福祉史のなかで、欧米の慈善、社会事業の実践的影響は色濃いが、中心的に議論されてきたのは、その大半がセツルメント運動やCOS 運動の影響である。たとえば、ジェーン・アダムズ実践思想の影響などは、筆者も含めて、詳細に紹介され、その影響について議論してきたところである。この紹介のされ方それ自体にも問題があったようであるが、ミュラーは、キリスト教界の偉人的扱いや、少なくとも異質の存在としてのみ紹介されてきただけで、社会事業史のなかで議論されたことはなかった。

筆者のこれまでのキリスト教社会福祉史の研究のなかで、特に日本の社会福祉史の基礎を築いたとされる山室軍平、石井十次が共通に影響を受けた人物として真っ先にジョージ・ミュラーの名前を挙げている。石井は「日本のミュラーにならんとす」（日誌）で記しているほどである。以上から、日本社会事業史のなかで、これまでほとんど中心的に取り上げられていないこの問題を明らかにし、ミュラーを日本の社会福祉史の中で明らかにするというのが研究上の「野心」であり、着想の原点にあった。これらのことから、まずは本研究では、ミュラーを社会事業史、慈善事業の歴史のなかで正当に位置づける作業が研究当初からの課題であった。

そこで、本研究では、１）これまでほとんど学術的に解明されることのなかったミュラーという人物の全体像について実証的に解明した。その際、２）彼が強く影響を受けたドイツの敬虔主義思想を明らかにすること。３）また彼もその運動のリーダーの一人であった英国のブラザレン運動を実証的に解明した。４）そのミュラーが日本に及ぼした影響について、山室軍平とミュラーの関係性の実証的考察、および、５）石井十次のミュラー理解とそのプロセスを詳細に実証的に明らかにした。これらを通じて、ミュラーの福祉思想が日本近代の社会事業形成の影響に及ぼした全体像を解明した。

２．研究の目的

本研究の目的は、大きく以下の 2 点となる。一つは、これまでアカデミックな俎上にはのぼることのなかったミュラーの人物像を社会事業史のコンテキストで実証的に解明したことである。この着眼点そのものにも学術的独自性がある。その際、彼が強く影響を受けたドイツの敬虔主義思想をフランケ（August Hermann Francke）の思想と比較検討すること、および英国のブラザレン運動のなかで実証的に解明したことである。これらはいまだに先行研究では明らかにされていない研究である。そして、もう一点は、そのミュラーが日本に及ぼした影響についてである。山室軍平のミュラーの受容、そして石井十次のミュラー理解とそのプロセスを詳細に明らかにすることによって、ミュラー思想がいかに日本で受容されていったのかを解明したことである。

３．研究の方法

研究方法としては、歴史研究であるが、特に思想史、および人物史の研究方法である。基本的に一次資料の解明という基本的な文献研究である。特に文献研究では、国内外のミュラー、石井十次、山室軍平の日誌、手紙、事業報告書である一次資料を分析対象とした。文献解題の中心は、ミュラーに関しては、“Autobiography of George Müller”、“A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller”（「事業報告書」）および A.T.ピアソンの詳細な伝記（Pierson, 1899）である。

４．研究成果

本科研費申請まで学術的に詳細を解明されることのなかったミュラーの人物の全体像を実証的に解明した。その際、なぜ、ミュラーがこれまで十分に取り上げられてこなかったのかの謎にも着目しつつ、ドイツの敬虔主義思想との関連からフランケが及ぼした影響について思想史的に解明した。また英国のブラザレン運動との関連から、ミュラーの思想を正確に描き出した。また、日本のミュラーの影響では、ミュラーが日本の近代社会事業に及ぼした影響について、明らかにしたが、特に、山室軍平への影響、そして石井十次への影響について実証的に克明に分析した。また、ミュラーの来日の足跡をもとにその受け入れ側の日本の反応を実証的に解明したことを通して、ミュラーが日本のキリスト教界にいかに受容されていったのかを解明した。最終的に、ミュラー思想の全貌と日本の社会事業の影響の受容過程の全体像を明らかにした。以上によって、ミュラーを日本の社会福祉学の中で位置づけることができた。

研究成果の詳細はすでに、学術雑誌、そして研究書を出版刊行して一般に公開しているので、詳細はそれらの既発表の論稿の結果に譲りたい。特に、木原活信（2023）『ジョージ・ミュラーとキリスト教社会福祉の源泉:「天助」の思想と日本への影響』（教文館）は、それらの集大成と位置づけられる。

以下、その内容を要約しておくことで、本研究の成果として位置づけておきたい。

（1）ミュラーの誕生から孤児院創設に至る軌跡(1805-1835)を一次資料の日誌、書簡、機関誌、自叙伝をもとに分析した。孤児院創設に至るまでの青年時代に限定して、彼の迷走、回心、訓練、孤児院着想に焦点をあて、それによってミュラーの思想形成過程とその内的世界観が繋がり、彼の事業と思想の全体像が鮮明になった。

（2）ミュラーの孤児院開設の草創期(1835-1842)に焦点をあて、これまでの伝記では触れられてこなかったミュラーの内面的葛藤と経営的問題に焦点をあてた。特に半年間にわたって精神的不調により休業せざるを得なかった経緯、そして逼迫した財政状況を分析した。

（3）孤児院をアシュリー・ダウンへ移転した経緯とその後の大規模化の経緯について議論した。時代的には 1842 年から 1860 年である。

（4）1875 年以降の晩年のミュラー(1860-1898)は、世界巡回伝道旅行に奔走するが、その宣教の足跡の過程を分析した。このときに日本へも来日している。そして 92 歳に死去するが、その間際まで働き続けた状況を史実から明らかにした。

（5）ミュラーの思想形成上におけるフランケの敬虔主義の影響について議論した。ハレを舞台にしたミュラーとフランケという二人のドイツ人にみられる歴史的邂逅を明らかにした。

（6）ミュラーとブラザレン運動の関係を論じた。その運動の原点であるグローヴス（Groves）から「フェイス・ミッション」の精神を継承し、組織ではなく、神のみに頼るという精神を孤児院運営の指針に活かした。一方でこの運動の「分裂」により、ダービ（Darby）らの主流派から「絶交」された結果、逆説的に「セクト化」から解放され、教派を超えた信仰復興「運動」的性格のオープン・ブラザレンの系譜が生じ、結果的に孤児院実践に注力していくこととなったが、その過程を分析した。

（7）ミュラーの来日(1886~1887)をめぐる宣教の足跡を明らかにした。新栄教会など東京、横浜の諸教会のミュラーの受け入れに関する経緯、そして関西、特に神戸での教会の働きを議論した。

（8）同志社でのミュラーの説教内容とその経緯と意義を明らかにした。この説教内容は 1889 年に新島襄が序文を書き、小冊子『ジョージ・ミューラル氏小伝幷演説　信仰の生涯』として発行された経緯を議論した。

（9）その小冊子を起点にして、山室軍平らの社会事業家へ強い影響を与えることになる．これらの事実を残された史資料に基づいて明らかにした。

(10) 日本の社会事業の巨匠、石井十次は、ミュラーを慕い、「日本のミュラーになる」ことを決意するほどにミュラーから影響を受けた。この経緯についてその詳細を明らかにした。

以上のことから、日本のキリスト教界および社会福祉の歴史におけるジョージ・ミュラーの影響と位置づけを明確にさせた。

本研究で公刊した研究成果は以下の通り：

木原活信（2018)「ジョージ・ミュラーの思想形成におけるフランケの敬虔主義の影響について」『評論・社会科学』（127）1-17.
機関リポジトリ　http://doi.org/10.14988/pa.2018.0000000362
木原活信（2019)「英国初期ブラザレン運動とジョージ・ミュラー ―その分裂と挫折が福祉実践思想形成に及ぼした影響をめぐって―」『キリスト教社会問題研究』68 号 1-33.
機関リポジトリ　http://doi.org/10.14988/pa.2019.0000000484
木原活信（2020)「ジョージ・ミュラーの来日をめぐる日本のキリスト教界の反応と社会福祉史への影響」『キリスト教社会問題研究』69 号 1-30.
機関リポジトリ　http://doi.org/10.14988/00027832
木原活信（2021)「ジョージ・ミュラーの青年時代の迷走と回心―孤児院創設に至る軌跡(1805-1835)―」『評論・社会科学』137 号　119-149.
機関リポジトリ http://doi.org/10.14988/00028365
木原活信（2021)「ジョージ・ミュラーの孤児院草創期（1835-1842）の苦悩と試練
–精神的不調と財政上の危機―」『評論・社会科学』138 号 pp.1-20.
機関リポジトリ　https://doi.org/10.14988/00028577
木原活信（2021)「ジョージ・ミュラーの資（史）料と先行研究の批判的検討」同志社大学人文科学研究所『キリスト教社会問題研究』第 70 号 pp.91-107.
機関リポジトリ https://doi.org/10.14988/00028577
木原活信（2023)『ジョージ・ミュラーとキリスト教社会福祉の源泉:「天助」の思想と日本への影響』（教文館）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 木原活信	４．巻 第1巻
２．論文標題 「ソーシャルワークと歴史研究方法―援助される側の「物語り」の成立の可能性ー」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『戦後社会福祉の歴史研究と方法ー継承・展開・創造』（社会事業史学会創立50周年記念論文集）	６．最初と最後の頁 367－398
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木原活信	４．巻 137号
２．論文標題 「ジョージ・ミュラーの青年時代の迷走と回心―孤児院創設に至る軌跡(1805-1835)―」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『評論・社会科学』	６．最初と最後の頁 119 - 149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/00028365	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木原活信	４．巻 138
２．論文標題 ジョージ・ミュラーの孤児院草創期(1835-1842)の苦悩と試練 ： 精神的不調と財政上の危機	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『評論・社会科学』	６．最初と最後の頁 1－19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/00028577	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木原活信	４．巻 第70号
２．論文標題 「ジョージ・ミュラーの資（史）料と先行研究の批判的検討」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『キリスト教社会問題研究』	６．最初と最後の頁 91-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/00028672	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 木原活信	4．巻 第69号
2．論文標題 「ジョージ・ミュラーの来日をめぐる日本のキリスト教界の反応と社会福祉史への影響」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『キリスト教社会問題研究』	6．最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/00027832	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木原活信	4．巻 68号
2．論文標題 「英国初期ブラザレン運動とジョージ・ミュラー ―その分裂と挫折が福祉実践思想形成に及ぼした影響をめぐって―」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『キリスト教社会問題研究』	6．最初と最後の頁 pp.1-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/pa.2019.0000000484	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木原活信	4．巻 69号
2．論文標題 「ジョージ・ミュラーの来日をめぐる日本のキリスト教界の反応と社会福祉史への影響」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『キリスト教社会問題研究』	6．最初と最後の頁 pp.1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/00027832	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木原活信	4．巻 137号
2．論文標題 「ジョージ・ミュラーの青年時代の迷走と回心―孤児院創設に至る軌跡(1805-1835)―」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『評論・社会科学』	6．最初と最後の頁 pp.119-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木原活信	4．巻 138号
2．論文標題 「ジョージ・ミュラーの孤児院草創期（1835-1842）の苦悩と試練ー精神的不調と財政上の危機ー」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『評論・社会科学』	6．最初と最後の頁 pp.1-20.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/00028577	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木原活信	4．巻 第70号
2．論文標題 「ジョージ・ミュラーの資（史）料と先行研究の批判的検討」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 同志社大学人文科学研究所『キリスト教社会問題研究』	6．最初と最後の頁 pp.91-107.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/00028672	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木原活信	4．巻 第54号
2．論文標題 『キリスト教社会福祉学』（招待論文）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 「キリスト教神学と社会福祉」日本キリスト教社会福祉学会学会誌	6．最初と最後の頁 pp.8-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 木原活信
2．発表標題 「19世紀中盤～20世紀初頭の英米の慈善事業とキリスト教ーGeorge MullerとJane Addamsの場合ー」
3．学会等名 キリスト教史学会　（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 木原活信、馬渕彰、平松英人、大岡聡、永岡正己
２．発表標題 「近代都市形成期のキリスト教と社会事業：黎明期の苦悩」「19世紀中盤～20
３．学会等名 キリスト教史学会　第72回大会シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計3件

１．著者名 木原活信	４．発行年 2022年
２．出版社 教文館	５．総ページ数 304
３．書名 『ジョージ・ミュラーとキリスト教社会福祉の源泉 ―「天助」の思想と日本への影響―』	

１．著者名 木原活信	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 250
３．書名 岩崎晋也、金子光一、木原活信編著『社会福祉の原理と政策』第3章「社会福祉の思想と哲学」pp.68-81. 終章「最後の一人の生存権」pp.244-246.	

１．著者名 木原活信	４．発行年 2021年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 268
３．書名 「ソーシャルワークの形成過程」『ソーシャルワークの基盤と専門職』（新・MINERVA社会福祉士養成テキストブック4)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

木原活信　公式ページ https://velvet-kihara.ssl-lolipop.jp/ 公式ブログ　雑想 https://joe0918.blogspot.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関